間奏曲

国技・相撲で進む国際化

大相撲で外国人力士の躍進が続いている。中でも特筆されるのがモンゴル力士の活躍だ。日本の力士と歴史や得意技を比較しながら、彼らの強さの秘密を探ろうというみんぱくゼミナール「比較相撲学事始」が国立民族学博物館（大阪・吹田）で開かれた。

今年初場所、幕内力士42人のうち外国出身は11人、中でも目立ったのは７人を占めるモンゴル力士の活躍。全勝優勝した朝青龍をはじめ、なんと６人が勝ち越した。

ゼミナールではモンゴル・中央アジアの遊牧文化に詳しい小長谷有紀教授（文化人類学）が歴史からアプローチした。モンゴル帝国の実録「元朝秘史」にも日本の「古事記」にも相撲で政敵を倒す話がある。「元々は統治の手段だった」という。

日本で相撲を開催するのは、政治家が腕力の強い軍団を統轄している証しだった。モンゴルでは競馬などとともに奉納儀礼として行われる。これは日本とも共通する。

モンゴル相撲のコスチュームを着けたバー・ボルドーさん（左）

和光大非常勤講師のバー・ボルドーさん（モンゴル文学）は内モンゴルのブフ（モンゴル相撲）のコスチュームで登場、技を実演しながら日本とモンゴルの相撲を比較した。

「投げ技を多用するのがモンゴル力士。これに対し日本はがっぷり四つに組み、寄り切る横綱相撲が理想」。両者を＜静と動＞と対比し、「モンゴル相撲には日本のような土俵がなく、相手の体を地面にたたき付けないと勝利を収められないから」と説明した。

これを裏付けるデータもある。魁皇、千代大海、若の里、雅山らの場合、押し出し、寄り切りなど相手を土俵の外に追い出す技が主流なのに対し、朝青龍や旭天鵬らには上手投げ、下手投げも多い。

単に投げ飛ばすだけではない。下手投げを打つときの朝青龍は、とどめを刺すようにまわしを持っていない方の手で相手の足を払うことがある。モンゴル相撲が身についているためだという。

長い間、70手だった大相撲の決まり手が2001年、82手になった。モンゴル力士ら〝業師〟の活躍を反映するところが大きいという。国技の中で展開される国際化。こんなことを考えながら、もうすぐ大阪で始まる春場所を楽しみに待っている。（由）